

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドルは短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことによりドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まっています。

米中通商交渉に関しては、交渉継続と米国の対中関税引き上げ延期により、警戒感が後退しましたが、6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となっており、これがドルの上値を抑える要因となるでしょう。

米中貿易摩擦値の警戒感は根強く残り、米国の利下げ観測が強まる中、当面は下値リスクが高いと思われるが、ドルが一方向的に売り込まれる経済状況にもなく、年後半も107円から112円程度のレンジが想定されます。

■短期展望

先週は、107円前半でスタートした後、米金利低下や米・イラン間対立等を受けて直近安値107円04銭を下抜けると106円78銭まで下落しました。

しかし、週末にG20、米中首脳会談を控え積極的に下値を追いかける展開とはならず、一時108円台を回復し、107円90銭水準で週を越えました。

今週は、米中首脳会談を受けた両国の通商交渉の再開と追加関税引き上げの延期を好感して、108円台でスタートしています。

今週末には米雇用統計の発表があり、当面は米経済指標がFRBの利下げ幅の判断材料になるものと思われ、結果を見極めたいところです。

先週は106円半ばがしっかりとサポートされたこともあり、今週のレンジは107円50銭～109円程度を想定します。